

## 「連用形転成名詞」の新用法について

中道 知子

### New Usage of Japanese Infinitive-derived Nouns

NAKAMICHI Tomoko

In this paper I discuss Japanese infinitive-derived nouns, e.g. “NAGARE” derived from “NAGARERU”, “HIKARI” derived from “HIKARU”. Though this word-formation is established as morphological rule, recently we can find new infinitive-derived nouns. Some of them have new meaning, e.g. “NOMI”. Some of them are newly made, e.g. “OKI”. We can find many examples on WWW. network.

#### 1 問題提起

名詞には、動詞の連用形からの転成によるものがある。例を挙げると次のようなものである。

①はさみで紙を切る。（「はさむ」から）

②帰りの新幹線の切符（「帰る」から）

このような連用形転成名詞の造語法は、古くからあるもので、それによって造語された語は、おびただしい数のごく普通に名詞として用いられている。したがって、本稿でとり上げるのは、連用形転成名詞の造語法や語形ではなく、その今までは見られなかった新しい意味・用法である。

中道が連用形転成名詞の新用法に気づいたのは、2年ほど前に、次のような発話を聞いたことがきっかけである。

③今日の飲みは6時からです。

これは、大学のゼミの学生が、その日のゼミコンパ（「コンパ」という語ももはや古いらしい。せいぜい「合コン」の中に残っている程度か。）を知らせる発話である。そこでの意味は、「飲み会」ということらしい。言うまでもなく、このような「飲み」の用法は、従来は見られなかったものである。その後、大学生以上を対象に折あるごとに質問してみたところ、30代以上はこの用法に違和感を示すが、それより若い世代ではごく普通の用法らしいという印象を受けている。

このことについては、最近、国広（2002）が言及している。（国広は、「連用形転用名詞」という用語を使っているが、論の対象は同じ現象についてである。）

国広は、下記のような「連用形転用名詞の新用法」をとりあげて、その意味的な側面として、「枠組み効果」という分析をしている。

④いつもバスで駅に出ている近所の知り合いの通勤者がある日歩いているのに出会って声をかける。

「今日は歩きですか。」（国広（2002）P. 75（2））

この「枠組み効果」という分析は、説得力がある。しかし、本稿の関心は、このような新用法の意味的な分析そのものではなく、新用法の出現現象にあり、現在とらえている姿を指摘するとともに、今後の展開を考えたい。

さて、従来型の連用形転成名詞も、すべての動詞から造語できるわけではない。例えば、「いく（またはゆく）」「かえる」「くる」という動詞について考えると、「いき（またはゆき）」「かえり」はあるが「き」は普通使わない。では、このような新用法においては、どうなのだろうか。検討すべき問題としては下記の2つが考えられる。

- (1) 従来から名詞として存在しているが、意味の面で新しい用法であるもの。
- (2) 従来は名詞化していなかった動詞が名詞化したもの。

## 2 一般的な問題

さて、ここで、従来の連用形転成名詞にみられる特徴を考えておきたい。一つは、意味的に対になる語を転成名詞形成の点から見たときの偏りである。

まず、「行く」と「来る」の対を取り上げる。この二つの語を連用形転成名詞の点から見た場合、「行き来」という形では使い、「行き」はごく普通に使う。しかし、「来」は使われない。一方、「行く」の対として「帰る」もある。この場合には、「行き帰り」も「行き」も「帰り」もすべてがごく普通に使われる。

このような様相を呈する語として、次のようなものがある。下記のリストでは、普通に使うものに○印、使わないものに×印をつけた。

「読む」と「書く」

○「読み」(例) 漢字の読みを漢字字典で調べる。

×「書き」

○「読み書き」(例) 読み書きを教える。

「寝る」と「起きる」

○「寝」(例) タベの寝が足りなくてひどく眠い。

×「起き」

○「寝起き」(例) 寝起きが悪くて不機嫌だ。

「乗る」と「降りる」

○「乗り」(例) 肌が荒れて化粧の乗りが悪い。

×「降り」

○「乗り降り」(例) 松葉杖を使っているのでバスの乗り降りが大変だ。

次に、「飲む」と「食べる」に対して「飲み食い」とは言うが「飲み食べ」とは言わないという現象がある。これは、語史上の語の新旧が関係するのかもしれない。

今取り上げている新用法は、この偏りのすきまを埋める形で生まれてきたのだろうか。

### 3 従来からの形の新用法

本節で扱うのは、連用形転成名詞としては一応従来から存在する語が、意味・用法の面では新しい振舞い方を見せている場合である。国広 2002 には、「つかみ」が下記のようにとり上げられている。

- ⑤大学の入学式で講演をした。(中略)しかし、私大はカラーが命。ここは明大をアイデンティティーとしてもらわねば。つかみは若者に圧倒的人気のバスケットマンガ『スラムダンク』。(齊藤孝「レスポンスする身体」、コラム「時のかたち」『朝日新聞』。) (国広2002 P. 75(1))

この「つかみ」について、国広は、「「つかみ」自体は大きな辞典には出ているが、そこに示された意味はどれも右の用法に合わない。」と指摘している。確かに、『大辞林 第二版』における記述を見るとそのとおりである。

つかみ 『大辞林』第二版

- (1) つかむこと。多く他の語と複合して用いる。「ひと一」
- (2) 囲碁の互い先の対局における着手の先後を決める方法。(以下略)
- (3) 花札で、(以下略)
- (4) 欲の深いこと。またその人。
- (5) 建築で、(以下略)

また、国広2002に「飲み」も新用法の例として挙げられている。

- ⑥まだちょっと飲みが足りない。(国広2002 P. 75)

この「飲み」は『大辞林 第二版』では次のようにとり上げられている。

「飲み」『大辞林 第二版』

- (1) (酒を) 飲むこと。「一に行く」。
- (2) 「飲み口」の略。
- (3) 「呑み行為」の略。

たしかに、例⑥の意味は、従来の「飲み」にはない意味である。新用法の意味は、一律ではない。例⑥における「飲み」の意味と先に挙げた例④の意味も違

う。

④（再掲）今日の飲みは6時からです。

⑥の意味は、「(飲む) 量」であり、④の意味は、「(飲む) 場、機会」である。

以下に、④⑥の類例を挙げる。飲む対象は酒だけではない。⑧は水である。

⑥の類例

⑦今日大会がありました。その後は当然飲み会がありましたが、最近の若い衆は鍛え方が足りないせいか、飲みが足りない感がありました。

(<http://www.geocities.co.jp/Bookend-Soseki/3674/guestbook1.html>)

⑧水の飲みが足りないのか、足のむくみはまだあるんですが、貧血がだいぶなくなりました。

(<http://www.kenko-club.biz/hitatenryosui/usersvoice.html>)

④の類例

⑨例のタン刺しを体験してもらう為に御近所の友達関係呼んで飲みを開くという話だったのだ

([http://neko.suki.gr.jp/alpine/abu/diary/NIKKI99\\_4.html](http://neko.suki.gr.jp/alpine/abu/diary/NIKKI99_4.html))

⑩飲むときはちょっとお洒落な店でスマートに、が基本です。これは納会など、先生が飲みに参加するときの決まりのようなものですから、

(<http://www.akutsuzemi.com/info2003/faq.html>)

これらの例は、すべてインターネットの検索エンジンによって採集されたものであり、新聞には類例がない(朝日新聞データベース1984年～2003年8月)。新用法であることからの現象といえる。

#### 4 新しく名詞化した語

「飲む」からの連用形転成名詞である「飲み」は、意味・用法に新しいものがあるという存在である。一方、「飲む」と対になる「食べる」について見ると、従来は「食べる」は連用形転成名詞としては使われていなかった。しかし、現在調べると、下記のような例が出てくる。これは、1節で提起した「従来は名詞化していなかった動詞が名詞化したもの」に該当する。もちろん、やはり新

聞記事には類例は皆無で、インターネット上でも「飲み」に比べると出現例は格段に少ない。

⑪カニは（中略）ツメにも脚の付け根にも身がぎっしり詰まっています、食べがあるというところではない。

(<http://homepage1.nifty.com/nyaon/food/diary0105.html>)

次の⑫⑬の意味の例は、主語が動物に限られる。

⑫青菜は（中略）インコちゃん達の健康を維持する為には欠かせない食べ物。（中略）小松菜の方が食べがいいかな。

([http://www10.ocn.ne.jp/~niyoro/chipishiji\\_news\\_1.html](http://www10.ocn.ne.jp/~niyoro/chipishiji_news_1.html))

⑬D r.猫ひげの動物病院日誌

市販されているウェットのキャットフードはどれも猫の一回分の食事としては多すぎてしまいます。そこで冷蔵庫で保存しますが、出すときは少し暖かい方が食べがいいはずです。

([http://www.emz.co.jp/pet/html/d\\_cat3.html](http://www.emz.co.jp/pet/html/d_cat3.html))

この「食べ」が出現したのはどういう事情によるのだろうか。中道は、その理由を、語の丁寧度の低下が関係しているのではないかと推測している。これは、「やる」という語の丁寧度が低下し、それに連動して「あげる」という語の丁寧度も低下してきた現象と、同じ種類の現象である。かつては、「花に水をやる」が正用であった。しかし、近年では、「やる」は好まれなくなり、その結果「花に水をあげる」がもはや誤用ではないという意識が普及している。「食べる」という語には、意味的に類義の動詞として「食う」があり、こちらは従来から連用形転成名詞「食い」がある。「食べる」と「食う」にも「あげる」「やる」と同じ現象が起きているのではないかと思う。

下に、『大辞林 第二版』の「食い」を引用する。

「食い」『大辞林 第二版』

(1) 食うこと。「飼い葉の一が細る」「一放題」

(2) 魚が餌に食いつくこと。「一が止まる」「一がいい」

このような「食い」と「食べ」を比較して、国広2002では次のように述べてい

る。

釣りで「今日は食いがよくない。」とは言うが、「今日のお客さんは食べがよくないね。」とは言えない。(国広2002 P.77)

しかし、このような「食べ」の用例は、採集できる。

⑭妹は子供の食べが良くないのに悩んでいた。時間があってお菓子を作ったりするのはいいが、それがご飯にさしつかえる。食べない、食べないと悩んでいた (<http://haruka1247.hp.infoseek.co.jp/ikuji.html>)

そして、先に推測として述べた「食べ」が出現した理由、すなわち、語の丁寧度の低下は、次のような現象から裏付けられるのではないか。それは「食べ逃げ」という語の出現である。この意味では、従来は「食い逃げ」という語が用いられるのが普通であり、国語辞書には「食い逃げ」はあっても「食べ逃げ」はない。しかし、現在、インターネット上には次のような「食べ逃げ」が使われている。ここでも、新聞には「食い逃げ」の用例は多数あるが、「食べ逃げ」は見られない。

⑮帰るお客さんが、入り口の反対にあるレジに出向くシステムだ。田舎らしくて気がおけないのいいが、食べ逃げの客がでないかと 心配だ。

(<http://www.pp.iij4u.or.jp/~jorbkato/tozan.html>)

⑯カワハギ, カワハギ科, ハゲ. 特徴 (とくちょう). 釣りをしていたら、餌を食べ逃げする。おちよぼ口で皮がザラザラしている。

(<http://www.infoeddy.ne.jp/~ishima/osakana/zukan/15kawahagi/hage.html>)

⑰うちの家族のロップイヤー (注: うさぎ) のココアちゃんです。特技はカステラやメロンの食べ逃げです。

([http://www2.tba.t-com.ne.jp/cocoa/pet/cocoa\\_19990521.html](http://www2.tba.t-com.ne.jp/cocoa/pet/cocoa_19990521.html))

主語が人間の場合だけでなく動物の場合にも、「食い逃げ」ではなく「食べ逃げ」が使われている。

「起き」も新しく名詞化している。対語的な「寝」は従来からあり、辞書にも記載がある。「起き」の用例は下に示すものである。これも新聞の用例は皆無である。

⑱、山札からのめくり札がうまく場札に合うこと。起きが良い。山札からのめくり札がなかなか場札に合わないこと。起きが悪い。

(<http://my.dreamwiz.com/pirami21/gostop34.html>)

⑱はゲーム分野の専門用語的である。

⑲PowerMacG3事ページ G3なのですが ここしばらく Sleepからの起きが悪いな……って思っていましたら

(<http://www.h-mdr.com/mdr/month/2002.01-.html>)

⑲はパソコンの専門用語的である。

⑳その原因は飲めば飲むほど「おい」と一言でパッと起きたりするの。ムチャクチャ起きがいい。

(<http://www16.big.or.jp/~405smap/radio/pow/2002/powsp0205.html>)

⑳は「(人間が) 起きること」である。

## 5 今後の見通し

本稿で扱った新用法は、新しい用法だけに、今現在の用例が採取できるメディアで調べることが必要である。その点でインターネット上の書き込みから得るところは大きい。しかし、そのためには、どういう動詞が新しく連用形転成名詞となっているのか見当をつけなくてはならない。そのため、現在、このような新用法の生み出し手であろう若い世代と協力して、調査を始めている。大学の私のゼミに所属している学生諸君と分担して、一つの国語辞書を共通の素材として、その中の和語単純動詞に限るが、連用形転成名詞として用いるかどうかを一つ一つ検討している。夏休みに第一段階の基本的作業を終えて、現在、その相互検証を進めている。次には、実際の使用例を検討することになる。最終的には、ゼミの共同研究として、この連用形転成名詞の新用法をまとめ、関係学界に報告できればと期待している。そして、やがては、このような現象の背景としての意味論的な解釈ができれば幸いである。



参考文献（本文中に言及したもののみ）

国広哲弥（2002）「連用形転用名詞の新用法は異常か」『言語』Vol. 31・No. 9